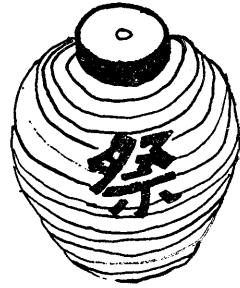


さ さ や か な  
で き ご と



大 道 博 子

— その 一 —

「おばちゃん どうぼうってどんな顔してるの？ (4歳女児)

「おばちゃん、ぼくお年玉30円でいいよ。30円以上はだめ」

「だって おばちゃんのお金なくなっちゃうから」 (小1男児)

「年をとって味がわからなくなってしまうっておいしいごちそうがもう作れなくなってしまった」 (81歳そう祖母)

「そんなことないよ、おばあちゃんの作ったごちそうおいしいよ。ねえお母さん、おばあちゃんとお母さんの作ったごちそうは

おいしいよ」

「ほくを だれもかわいがってくれない。皆がほくをばかにしてるから死にたい」

泣いたり笑ったり、甘えたりすねたり叱られたり……七人家族の一日はそれはにぎやかです。そのにぎやかさの中で私たち大人は、ときには返事につまり、涙が出る程笑い、その心根のやさしさにホロリとし、暗くなっても帰ってこない子どもにオロオロし……。といった三人の子ども中心の生活がくりかえされていきます。

私は随分長い間、乳幼児が身近にいない大人だけの生活をしておりました。ですから家庭の中での幼児の生活ぶりは、保護者の話からまた近隣の姿を通して知るといふ程度の内容しか持っておりませんでした。幼稚園の中で子どもたちの生活については、ある程度話をするとはできるとしても、家庭での子どもたちの生活については、具体的に何も話をするとはできませんでした。家庭生活の重要さを説きながらも、このことについて切実に考えることもなく過してきたと思います。しかし、甥夫婦とその子どもたち、私の母と私と共に生活をするようになってから、長年の夢がかなえられたよううれしさを感じているのです。出生してから日に日に人間として生長していく姿を目の当たりに見ることができるといふことです。

すでにその子らしさをもって幼稚園に入園してくる子どもたちを迎えて、私達は教育をしていくわけですが、その子どもらしさが家庭で形成されていく過程や、ときどきにまき起るいろいろなできごとにかかわる大人たちとの人間関係の現実の姿をみることは、私にとってかけがえのない勉強の場でございます。

めまぐるしくいろいろなことが頭の中を駆けめぐり、その一つ一つを確かめずにはいられない子どもの姿をみる時、大人ではとても想像できない子どもたちの世界があることを知らされます。ま

た、五ヶ月の弟が生まれ、大人たちの世話が集中することにしつと、すねたり甘えたりする姿をみると、まだ生後五年しかたっていないということに改めて思ったりします。

幼稚園で園長として保護者に話をしながらも、なかなか理想通りにならない家庭人としての自分の姿を思うことがあります。しかし両方の立場の話ができるということは、今までと違い具体性をもった幾分なりとも保護者の方に納得していただける話ができるのではないかと思っております。

## —その二—

昨年度の年間行事のあり方の反省から、今年度はクリスマスプレゼントとしての贈りものを「お年玉」として子どもたちに贈ることにいたしました。

「お年玉をどのようにして、子どもたちにプレゼントしようか」と思索していた時、ずっと以前に耳にした歌が、ふと浮んできました。

実際には歌った記憶はなく曲はわからないのですが、はじめの歌詞だけ妙に印象に残っていたのです。それは「お正月さんがいらしたよ……」ということばです。「これがいい、サンタクロースの代りにお正月さんにしよう」

それから数日間、園長の内職がはじまりました。今までにこそとためていた包装紙や製作の残り紙・金銀のテープを利用して、ひまひまに作っていました。

細長く切りつないだ紙や、うずまき状に切った紙や、折りたたんだ紙に各クラスのようなすをもちこみ、お正月さんからのメッセージとしました。次にその手紙を入れる箱ですがマジックインキの入っていた小箱にそれぞれクラスカラーのビニルテープをまき、リボンをつけて飾りました。

箱の中にボツンと手紙だけでは寂しい感じがしたので、何か子どもの遊べるものと思い、カラー波ボール紙でこまを作って入れることにしました。波ボール紙を細く切りくると巻けば簡単にできると思っていましたのに、意外にむずかしく3つ目位からコツがわかりうまく作ることができるようになりました。

子どもに何かを体験させる時、教師も作ったりしてみることに大切さを改めて感じました。自分が体験してみますと、子どもに経験させる時の指導のポイントがわかると思います。例えば、あらかじめ知らせておくことよいか。子どもに自由にさせながら考えさせるところはどこか、教師が援助してやる部分はどこかなど予想できると思います。この原則ともいえることがおそろかになっっているのではないでしょうか。

波ボール紙の幅や色・巻く量を変化させながら10個のこまを作りあげ、箱に2個ずつ入れました。プレゼントも一つ一つ紙袋に入れてシールで止め、クラスごとに包装紙でつつみリボンをかけて準備は終わりました。

担任の先生にもどんなものがどのように入っているか当日まで秘密にしてありました。

当日、主任と二人で小箱とプレゼントを捧げもって一クラスごとに回りました。

それぞれ遊んでいた子どもたちは、担任の先生の呼びかけに、さっと集まってきました。どの子どもも「何だろう？」と期待の目でじっとプレゼントをみつめています。

「今日のこの顔は、どの子もすばらしいな」と先生は感じ、真剣にいきいきと全力投球できるような生活を子どもに経験させたいと思ったことです。

どうしてこの包みを園長先生が持ってきたかを話し、あとは担任の先生に任せることにしました。五人の先生がそれぞれ演出よろしく子どもに箱の中の手紙をよんだり、こまをみせたりしたのですが、クラスごとに子どもの反応がことなり、そのクラスらしさが感じられて興味深く思いました。

「誰からのプレゼントか？」ということが問題で、「サンタクロー

「スだよ」という子どももいたのですが、メッセージの最後の「お正月さんより」ということばを聞いて、

「へえー、お正月さんだって！」

「お正月さんでどこにいるのかな？」

と、素直に受け入れてくれたようです。先生から「お正月さんというのは新鮮でいい」とか「なる程お正月さんとはいいですね」などと好評でした。

とにかく新しいこころみは、私の思いを先生方にうまく受けてもらうことができ、子どもたちに楽しいふんい気の中でプレゼントすることができうれいひとときでした。

### — その三 —

「園長先生はおばあさん？　ほんとうにおばあさん？」K男は私と顔を合わせるたびに聞くのです。

「家へ帰ると先生はおばあさんよ」と答えると、とても不思議そうな顔をする。

「先生、なにどし？」

「先生はライオン」

「ライオンなんてないよ」

「年いくつ？」

「いくつかな？」しばらく考えて

「50歳」(当らずといえども遠からず、なかなかいいところをいあてるものであると心の中で思う)

「そう、当り」

たしかに5歳の子どもからみれば、おばあさんとしかうつらないでしょう。しかし、何度も何度も不思議そうに聞くと、いうことは、その子どものおばあさんというイメージと、私から受けるイメージとが合わないのであらうと思うのです。

考えてみますと近頃電車の中で若い人が席を立ててゆずつてくれたり、あいている席を教えてくれたりすることが多くなってきました。若い人からみれば随分年寄りにみえるのでしょう。あるいは疲れ果てたあわれな姿にうつったのかもかもしれません。

幼稚園でまた家庭でなににもとらわれないさわやかな子どもたちと接しているうちに、年月をかさね、いつのまにか子どもたちから「おばあさん」といわれるようになってしまいました。いつのまにかといえることは幸せな生活であったといえるかもしれません。

指導・行事・事務処理などについて毎学期反省会を行なうのですが、その中で私が最も関心のあることは、各クラス担任の指導に対する反省です。子どものみ方・生活指導のあり方・教材の選

扱・遊びへのかかり方・ひとりひとりの子どもの成長の姿のとらえ方など反省内容はさまざまですが、年齢や経験年数に応じたその先生らしい反省がなされ、心を新たに三学期にそなえ、あるいは二年目を迎えることができたことをうれしく思います。

特に、経験の浅い先生が自分の指導に行きづまりを感じ、真剣に思いなやむ姿に心打たれました。かつては私にもこのような時代があったとなつかしく思うと同時に、最近の自分自身を振りかえり恥ずかしさと寂しさを感じたのです。今までの経験だけに頼ってものをいっているのではないだろうか。ぬるま湯にひたり、とにかくその日をすごしているような姿が、若い人に席をゆずられるようなことになったのではないかと思うのです。

新聞やテレビで報道されている子どもたちの非行や暴力、親子関係のひずみや社会の重圧から発生するいろいろな事件を人々はどうのように受けとめているのでしょうか。年ごとに情緒不安定な子どもがふえ、園に対する保護者の意識も変わってきています。暗い将来につながる芽が皆無であるといい切れることはできないように感じられる此の頃です。私たち教師も汚染されている一人であることを反省しなければなりません。

一斉保育・自由保育・自由遊びという幼稚園特有の用語が、指導書から消えて何年かを経過しました。しかし、永年にわたって

しみこんだこれらの用語は依然として存在し、形態にとらわれた論議がくりかえされていることは残念でなりません。形態と内容を混同し二者択一、互いにその欠点のみを指摘し合う傾向が根強く残っています。子どもの発達に即した指導のあり方として形態や内容を考えていかなければこの論議から脱することはできないと思います。

子どもたちから「おばあさん」といわれることは仕方がないとしても、いつまでも何かを求めて歩みつづけていくファイトを持ちつづけていきたいと、思いを新たにしているこの頃です。

原稿依頼の電話をいただきましてお受けすることにしました。が、あれこれ考えている間に約束の日がせまりあわてたことですが、むずかしい話をするともかくこともできない私ですから、ありのままのできごと、思いでこの頁をうめさせていただくことにいたしました。

(名古屋市・西山台幼稚園)